

2008/9/12(金) 午後 4:59

無題

練習用



0





写真: 上より、ウィーン南駅4番ホーム、ボヘミアの大地、ボヘミアの村、プラハ・ホレショヴィツェ駅。

【ボヘミア行】

ボヘミアンに憧れていた、正確にはその言葉の響きに憧れとか夢みたいなものを感じていたのだろう。自由人・芸術家・根なし草、体制からはみ出してみたい男たちのロマンをどこかくすぐる。ボヘミアンの故郷はボヘミアの大地、チャンスがあればぜひ行ってみたいと思っていた。旅程が知らされたとき一番気になったのがウィーンからプラハの移動のこと、M.A.さんに鉄路もありますよと言われて直ぐ申し込んだ。

楽友会でT.F.さんとY.N.さんが話に乗ってくれ、ミュンヘンのT.K.くん加わり、総勢4人の小旅行と決まった。成田でEuropean Train Ticket を手にした時のこと忘れられない。

フランクもボヘミアを旅している。旅とは言えない、テレージェンシュタット収容所に向けての移送、フランクにとって過酷な運命の始まりだった。1942年9月24日フランク一家の5人(両親のガブリエル・エルザ、妻ティリーと母親エマ)はアスバング駅(=現ウィーン南駅)を出発、夜を徹して北上した。普通の人たちは貨車に積み込まれたが、フランクは医師の立場で座席付きコンパートメントに乗ることができた。赤坂本で移送経路を確認すると、ウィーンを北西に向かい国境を越えてまっすぐ北上、プラハを通過してテレージェンシュタットに一番近いパウショヴィッツ駅までである。出発時行く先を告げられていたかは分からない。そのころアウシュヴィッツの存在は知られていなかったのも、せいぜいリトアニアかチェコスロヴァキアかポーランドかの感覚であったようだ。普通の人々は真っ暗闇のボヘミアの大地を夜通し、それこそ、闇雲に移送させられていたのだ。

我々が乗る列車はEC(ヨーロッパシティ)172号、ウィーンが始発、プラハ・ドレスデン・ベルリンと経由しハンブルグが終点の国際列車である。Fさんがずっと消えやがてビールとワインを携えて嬉しげに現れた。ウィーン南駅での先ずの仕事はキオスクを見つけることと言うから恐れ入る、とても研修に参加する態度とは思えない。ここだ・ここ指定の席に座り、乾杯は動き出してから…とワクワクしていたら、怖そうな顔のあんちゃんたちがここは俺らの席という。切符を確かめるともうひと車両先、おおわらわで移動、出発前にやっと間に合い座って安堵の胸をなでおろした。6人掛けのコンパートメント、すでにチェコ人らしき老夫妻が静かに腰かけている。EC172号はなんの前触れもなく動き出す、この何気なく動きだし気がつくときと停まっているという感覚、いかにも欧州の鉄道らしくなかなか好いもので気に入っていった。

とりあえずは無事にプラハに向かうことが出来たことに乾杯！でボヘミア行が始まった。ウィーンを出て間もなくドナウ川を渡り、スロヴァキアとの国境沿いに流れるモラバ川を北に遡りチェコに入って、丘陵地帯が広がり大地らしい風景になってきた。喉も潤いほろ酔い加減となったころ、このボヘミアについての押し付けガイドを俺が始める。車中一杯にチェコの地図を広げ、ウィーンとプラハはここ、フランク一家が通ったのはこの経路、テレージェンシュタットはここアウシュヴィッツはここ、チェコ語表記ではOswiecim と指差し、さらにフランクはミュンヘンの西のダッハウまで移送され、そこで解放された、移送途中、育った街レオポルドシュタット近くのウィーン北駅から故郷をのぞき見たことなどを、さも自分の目で見てきたように説明をする。なんのことはない、すべて赤坂本に載っていることのパクリである。

これを機に車中談義がにぎやかに始まった。ロゴゼミとロゴセラピーはもちろんのこと、Kくんのいまとこれからのことを聞き、Nさんのご家族とお仕事の話聞き、Fさんと俺の話はどこかにすっ飛んでしまった。これではヤバイと思った俺、かねて用意のCDスメタナの「我が祖国」をKくんの耳にあてて聴かせる。これを見てNさん、わりかしロマンチストね、男ってみんなロマンチストですよと俺が反抗する。そうね、そのときのNさんの目は遠い東京のご主人を見ていたと思うが、どうか。Kくんは心地よげに居眠りの精神次元の世界にいつている。どうやら、ボヘミアンの心を揺する「我が祖国」もKくんにはボヘミア地方の子守歌でしかなかったようだ。車窓にはボヘミアの風景が流れている。茫洋としたボヘミアの大地を眺めたり、写真に収めたりして前半戦は終了した。

Fさんが列車の中に売店を発見、チェコ語を駆使しビールとワインを仕入れてきて、後半戦が始まった。国境を越

えてボヘミアの奥深く、ビールもシュティーグルからピルスナー・ウルケルに変わっていた…か、よく覚えていない。前半戦と同じように活発な車中談義を交わした…のだろう…、じつはこのこともよく覚えていない。気がついたら、あっという間に時間が通り過ぎていたのだ。午後2時を過ぎたころ、もうそろそろですよ、のKくんの声に我々は降車体制にはいる。EC172号プラハは通過点、このまま酔っていたらハンブルグまで行ってしまう、Kくんはそのままミュンヘンに帰ればいいが俺たちはどうする？の軽口もでてくる。列車は20分以上も悠々と遅れ、なにげなくホームに停まった。そこがプラハ郊外ホレショヴィツェ駅、わが故郷青森駅に似たさびしげなホーム風景だった。ホームに降り立った人たちの顔立ちもなんとなく昨日までとは違う気がする。…おもえば遠くに来たものだ…思わず口ずさんでいた。それにしてもこの4時間半のボヘミア行、贅沢な時間だった。

問題はこれから、どうやってホテルに辿り着くかである。まずは駅構内で円をコルナに両替し、駅前に出てタクシーを探す。プラハ郊外ホレショヴィツェ駅前は一殺風景、タクシーらしき車が数台並んでいるだけ。大柄・屈強な男が近づいてきて、乗っけるぜ・どこまで行くんだいとでも言っているのだろう。さっきまでにこやかな顔のKくん毅然とした態度で交渉を始めた。OKと答えたかどうか、とにかく走りだす。最後になにを聞いたの？ホテルまでのだいたいの料金ですよ、押さえどころです。なるほど、一同Kくに最敬礼、こうして我々は無事到着、カレル橋でみなさんに再会できたのであった。(M.N.記)